Kappa Novels

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　花の棺（ひつぎ）

昭和50年9月20日　初版発行

著者　山村美紗（やまむらみさ）
京都府宇治市木幡西浦町10
発行者　小保方宇三郎
印刷者　萩原崇男
東京都文京区後楽2—21—12
萩原印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替東京115347
株式会社　光文社
電話　東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（明泉堂製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Misa Yamamura 1975
（分）0-2-93（製）02276（出）2271（0）
Printed in Japan

長編推理小説・書下ろし

花の棺

山村美紗

カッパ・ノベルス

日本財団支援

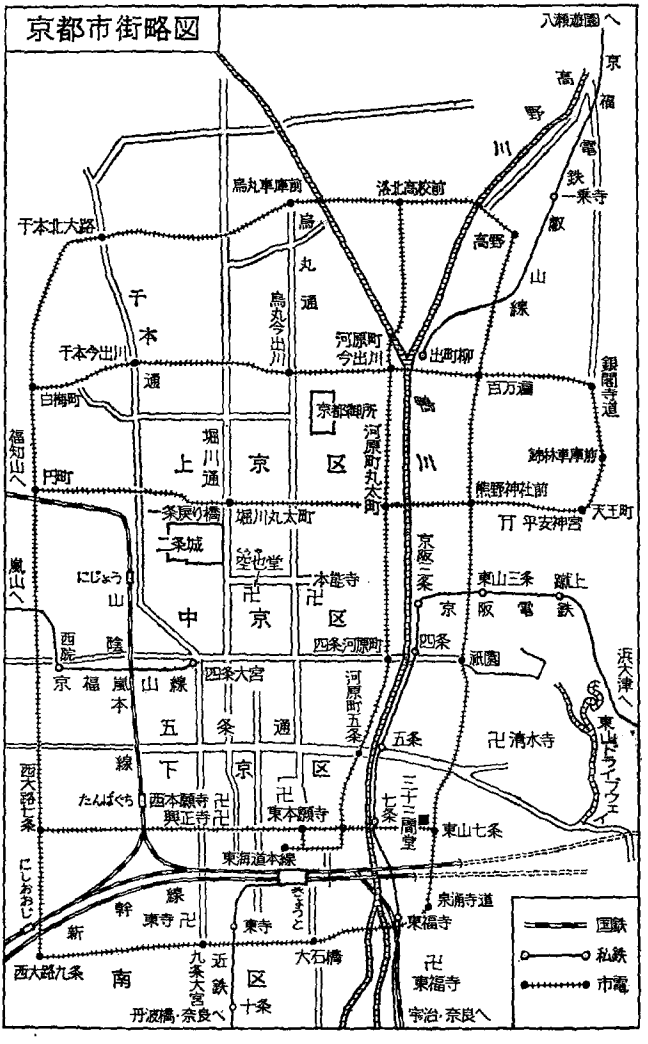
笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

花の棺（ひつぎ）　目次

V・I・P（重要人物）　5
二条城事件　26
三条空也（くうや）堂の死　52
茶室の殺人　79
雪の密室（シークレット・ルーム）　101
六条西本願寺　114
華道大会　120
キャンピングカー消失　140
オートキャンプ場の謎（なぞ）　155
死のラブサイン　164
三人の容疑者　192
トリックの解明　207
告白　219

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert



イラストレーション／安岡 旦　写真／浅野喜市

第一章　重要人物 V・I・P

1

二月五日。火曜日の東京国際空港は、緊張した空気に包まれていた。

次期大統領選に出馬を予定されているアメリカの副大統領が、一人娘を連れて、午後二時四十分に到着するからである。

「あと五分で到着です」

と、秘書官が外務大臣の耳にささやくと、普段はヌーボーとして、村夫子のアダ名がついている外相も、今日ばかりは緊張した面持ちでうなずいた。来日の用件は、日米間の意見調整という曖昧な表現をされているが、石油をはじめとするエネルギー問題、食糧問題などについて、アメリカ側から強い要望が出されるだろうと予想されていたからである。

二時四十分。空港につめかけた政財界の有力者たちの眼が一斉に東の空にそそがれた。

それに、何百人という報道陣、警官隊の眼が一斉に東の空にそそがれた。

まだ肌寒い、どんよりと曇った空に、小さな黒点が現われ、それはみるみる大きくなって、巨大なジェット機の姿となり、あたりの空気をゆるがす爆音とともに、滑走路に着陸した。

見事な着地だった。

米国旗をはためかせた副大統領専用機は、ゆっくりと方向転換し、徐々にエンジン音を小さくして、二十二番のV・I・Pスポットに停止した。

専用機にタラップがつけられ、二五メートルの、ワイン・レッドの絨毯が空港係員によって敷きつめられる。政府要人が整列し、報道陣がその周囲を取り囲んだ。

一瞬の静寂と緊張が、その一角を支配した。その静けさの中を、ジェット機のドアが開かれ、どんな名優も及ばぬタイミングのよさで、一人の男がゆったりと姿を現わした。

異常なほど高い鼻、ひきしまった薄い唇、冷酷とも見える青い眼は、一見して彼が、ユダヤ系アメリカ人であることを示していた。アメリカ副大統領ルイス・ターナ

ー、五十七歳である。
ターナーは、自分に向けられているカメラの放列に向かって手をあげてポーズをとったあと、初老とは思えぬ元気な足取りで、タラップを降りはじめた。
ちょうど、タラップの中ほどまで降りたところで、彼は急に立ち止まってうしろを振り返った。それが合図のように、若い女性の姿がドアのところに現われた。
なだらかなウエーブの金髪、うぶ毛の光るピンク色の肌、オレンジ色の斬新なドレスを着た美少女である。期せずして報道陣の中から歓声が起きた。
副大統領は、彼女が降りて来るのを待ち、彼女を抱きかかえるようにして、もう一度、ポーズを作った。それは、優しい父親のポーズだった。
またひとしきり、カメラのシャッター音がし、フラッシュが閃いた。
彼女の名前はキャサリン。副大統領の一人娘で、コロンビア大学の三年生。去年、ミス・大学に選ばれた美人である。パワー・ポリティックス（力の政治）の信奉者で、冷酷で理知的と評判の副大統領も、彼女にだけは甘いといわれている。
ミス・キャサリンに対して、副大統領以上にカメラが集中したのは、その美貌と若さのためもあったろうが、一週間の日本滞在予定のあと、副大統領は次の訪問地であるフィリピンに向かうことになっていたが、彼女だけは日本に残って、日本独自の文化、特に、生け花を勉強したい希望を洩らしていると伝えられていたからでもある。

2

外相も、ミス・キャサリンの扱いには苦慮した。相手が二十歳の娘だから、いかつい警察のボディガードをつけるわけにもいかない。といって、副大統領の一人娘なのだから、ある程度の身辺警護もつけなければならない。
外相は、いくつかの案を考えた。
外相にも、大学四年になる娘がいる。生け花の心得もあるので、彼女に、ミス・キャサリンの面倒をみさせようとも考えたのだが、娘は、親の心、子知らずで、三日前から、ボーイフレンドとカナダへスキーに出かけてしまった。それに、女ではガード役にはならないかもしれない。
第二は、秘書官にエスコート役をさせる案だった。外

相には、秘書官が三人いる。三人とも、大学を優秀な成績で卒業し、頭も切れるし、語学も達者である。ただ、いちばん若い秘書官でも四十歳という年齢が問題だった。二十歳のミス・キャサリンの相手をさせるには、世代が違いすぎる不安があった。話が合わず、彼女を退屈させる心配がある。

考えた末、外相が白羽の矢を立てたのは、甥の浜口一郎だった。

外相が、浜口を考えたのは、べつに自分の甥だという身びいきのためではない。三十歳になったばかりの年齢と、一八〇センチの長身が、エスコート役として似合うのと、ミス・キャサリンと同じコロンビア大学に昨秋まで留学しており、その点で、語学力はもちろん、話も合うだろうと考えたからである。一つだけ心配なことといえば、外相の眼から見て、ちょっと変わり者なことだった。

外相の兄である一郎の父親は、彼を政治家にしたかったらしい。しかし、浜口自身は政治学を専攻しながら、現実の政界にはあまり関心がない。

国立T大学の法学部政治学科を出て、大学院を終了したあと、アメリカに留学し、コロンビア大学で Ph. D の学位をとって、昨秋帰国し、母校で研究にあけくれている。

浜口を、ミス・キャサリンのエスコート役にしようと考えた理由の中には、これを機会に、彼を政治の世界に引き入れようという外相の深謀遠慮もあったといえないことはない。

二日前、外相は自宅に甥を呼びよせて、強引にエスコート役を承諾させたのである。

3

ターナー副大統領は、自信に満ちた声で、簡単なメッセージを読み上げたあと、居並ぶ政・財界人の一人一人と握手して歩いた。

浜口一郎が外相の紹介で、ミス・キャサリンと握手を交わしたのは、いちばん最後であった。外相にしてみたら、浜口の身分が、自分の個人秘書ということで遠慮したのだろう。

だが外国生活の長かった浜口には、そうした席順にこだわる心理は皆無だった。

「あなたのエスコート役の浜口一郎です」

と外相は、彼をミス・キャサリンに紹介した。
「日本に滞在中は、何ごとでも、彼に申しつけてください」
外相の英語は、ロンドン仕込みで正確だが、彼と同時代の英語がたいてい、そうであるように、堅苦しく、いかにも日本人の喋る英語になっている。
「浜口です」
と、浜口一郎は微笑した。
「昨秋まで、コロンビア大学におりました。帰国する前だったら、ミス・大学の選挙で僕も、あなたに一票投じられたのに残念です」
その言葉に、緊張気味だったキャサリンの顔がほころびた。
「じゃあ、ドクター・コワルスキーをご存知？」
「もちろん。『さまよえる北極熊』は、僕たちがつけた綽名ですから」
「あれ、あなた方がつけたの。ぴったりだわ」
キャサリンは、にっこり笑った。浜口が、北極熊の吠え方を真似して見せると、彼女は、こらえ切れなくなったように、大声で笑った。
あわてて外相が、「あまり親しくなってはならん。公私を混同するな」と、小声で叱った。
浜口は苦笑した。二日前、叔父に注意された言葉を思い出したからである。
――叔父は命令口調で、浜口にキャサリンのエスコート役を引き受けさせてから、彼が承諾すると、今度は心配げに、
『ロマンスはいかんよ、ロマンスは』
と、いったものである。
『ロマンスって何です？』
と彼がきくと、外相は、眼鏡の奥の小さな眼をパチパチさせてから、
『君はその年でまだ独身だ。それに、陽子にいわせると、女性にセックスアピールを感じさせるらしい。だからロマンスはいかんといっているのだ』
といった。――
その言葉を思い出して苦笑したのである。
ミス・キャサリンの華やかな笑い声に、またひとしきり、彼女に向かってカメラのシャッターが切られた。
和服を着た日本女性が、彼女に花束を差し出した。彼女の腕の中は、花束で、たちまちいっぱいになってしまった。

「持ちましょう」
と、浜口は、キャサリンが持て余している花束を受け取った。
「大変な歓迎ね」
キャサリンは、浜口に小声でいった。それを楽しんでいるようでもあり、いささか戸惑っているようでもあった。
「私が副大統領の娘だからかしら？」
「かもしれませんね。それに、若く、美しいからでしょう。きっと滞在中は、週刊誌に追いかけられますよ」
「カメラマンから私を守ってくださるのも、あなたのお役目？」
「叔父はそう期待しているようですが、日本のマスコミは凄いですからね」
浜口がいったとき、それを証明するかのように、いきなり二人の間に、長細いマイクが突き出された。

4

翌日の副大統領歓迎のレセプションは、首相がホスト役で、首相官邸の大広間で開かれた。全閣僚と、政・財界人が集まり、それとほとんど同数のジャーナリスト、カメラマンが広間にあふれていた。
浜口も正装して出席した。彼の肩書は外相秘書である。自由人を自認している浜口には、そんな肩書も窮屈だし、ネクタイも窮屈である。
浜口は、叔父から離れた場所で、シャンパンを飲みながら、パーティを眺めていた。
ミス・キャサリンは、今日はサンローランがデザインした白の礼服を着ていた。羽田へ降りたときは、軽装で、それが彼女の若さを強調して、すがすがしい印象を与えていたが、今日の豪華な服装は、別の、大人っぽい魅力を引き出している。
彼女は、相変わらずカメラマンに囲まれていた。若くて美人の彼女は、絶好の被写体なのだ。
えたいの知れない男女が、彼女に何か話しかけては握手を求めている。このパーティに招待されているからには、有名人なのだろうが、浜口には興味の持てない人間ばかりだった。
キャサリンも、さぞ退屈だろうと思うのだが、副大統領の娘という立場を心得ているのか、次から次へ挨拶にやって来る日本人の一人一人に、惜しみなく笑顔をふり

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

まいている。
それでも一人になった瞬間に、手で口を押え、小さなあくびをした。それを見て浜口は、つい笑ってしまった。彼女も人の子なのだ。
彼はキャサリンの傍へ行くと、「廊下へ出てみませんか」と誘った。彼女はすぐ、彼と一緒に廊下へ出ると、大きく伸びをした。大人の顔の中に、ひょいと二十歳の顔がのぞいた感じだった。
「助かったわ」
とキャサリンは、笑顔でいった。
「こんなにたくさん、名刺を貰ったんだけど、日本の文字は読めなくて」
なるほど、彼女の手の中には、二十枚近い名刺があった。日本人は名刺の交換が好きだなと、浜口は改めて思った。キャサリンに読めると思って渡したのだろうか。
全部が肩書つきの名刺である。代議士や財界人の名刺に混じって、華道の家元や理事の名刺もあった。
「あなたは日本の生け花に興味があるそうですね？」
「ええ。イケバナに興味があるの。フラワーアレンジメントに」
「そのせいだな。日本のいろいろな流派の人がパーティに来ている」
彼らが、何の目的で、今日のパーティにやって来たのか、浜口には想像がついた。
日本の生け花には何千という流派があるらしいが、一般に三大流派と呼ばれているのは、東流、京流、新流の三つである。それぞれ百万単位の門下生を擁しているが、その勢力争いには激しいものがあると、浜口は聞いていた。そうした彼らにとって、アメリカ副大統領の一人娘は、格好の宣伝材料に映ったとしてもおかしくはない。だから、今日のパーティにやって来たに決まっている。また、門下生の多い華道界は、代議士にとって格好の票田でもある。特に保守党の場合、各流派の後援を受けた代議士が多い。現に浜口の叔父の派閥に属している大木代議士は、自治大臣の経験者だが、彼は東流の後援を受けて当選している。
「僕は、あなたを生け花の家元に紹介すると同時に、家元から守らなきゃならないかもしれない」
と、浜口は笑った。
彼は冗談めかしていったのだが、それはすぐ、現実のことになった。
パーティが終わるころになって叔父の外相につかまっ

た浜口は、
「明日、三大流派の家元を私の自宅に招待するよう手配した。ミス・キャサリンに紹介するから……」
と、いわれたからである。
「家元たちは、すでに今日、彼女に名刺を渡していますよ」
「ああ、わかってる。だが、正式に紹介して欲しいといってきたんだ。日米親善という名目もあるし……」
「大木代議士あたりからの圧力もあったんじゃありませんか」
「つまらんことをいうな。とにかく、私は副大統領との会談があるから出席できん。だからミス・キャサリンと一緒に出席する君に頼むんだ。あくまでも各流派に公平にやってもらいたい」
「叔母さまは出席されるんですか？」
「もちろん、寿子には、ホステス役を勤めてもらうつもりだよ」
「たしか、叔母さまは、京流の教授免状をもっておられましたね」
「だが、首相令嬢の典子さんは東流でね……」
と外相は、苦笑してから、
「話は違うが、きみに注意しておきたいことがある」
「何です？」
「きみにミス・キャサリンのエスコートを頼んだとき、ロマンスはいかんといっておいたはずだ」
「覚えていますよ」
「それなら、彼女と二人で廊下でひそひそ話はしないで欲しいな。新聞記者に、あの二人はどんな関係かときかれて冷や汗をかいたぞ」

5

翌日の午後、浜口は、迎賓館にキャサリンを迎えに行き、杉並区久我山にある外相私邸に案内した。
車が私邸の門内に滑り込むと、玄関に今日のホステス役の外相夫人、首相令嬢の典子、それに三人の華道の家元が、キャサリンを迎えた。
東流、京流とも、家元は男だったが、新流のほうは、中年の女性が家元だった。三人とも何となく態度がぎごちないのは、お互いに牽制し合っているからだろう。
キャサリンは、三人の家元の誰にも、同じように親しげに握手をし、日本語で、

「ニホンノイケバナ、タイヘン、ウツクシイデス」
といった。読むのは苦手だが、大学でアジア文化を専攻しているというだけに、話すことはかなりの程度できるらしい。
外相夫人の寿子は、中庭の見渡せる広間に一同を案内した。昔、S男爵の邸だったというだけに、部屋の造りは古風だが、豪華である。
キャサリンが席に着くと、寿子が三人の家元を彼女に紹介した。
最初に立ったのは、六十二歳の和服姿の東流家元だったが、あとで浜口が叔母に聞いたところでは、挨拶の順番をどうするかでかなりもめて、結局、年齢順にして、三人に了解してもらったということだった。浜口から見れば、つまらないことだと思うのだが、百何十万人という門下生の上に君臨している家元にしてみれば、ゆるがせにできないことなのだろう。
東流家元は、小さく咳払いしてから、こう挨拶した。
「東流家元の東郷流風でございます。私のほうの流儀は、日本古来からある東洋的な伝統に、ヨーロッパ的なものを取り入れた、新しい感覚のものでございます。さいわい、三日あとに、ちょっとした展覧会をやることになっておりますので、ぜひ、ご来席の栄を賜わりたいと存じます」
浜口は通訳しながら、三日後の展覧会というのは、どうせキャサリンの来日のため、急に計画したものだろうと、皮肉に考えていた。でっぷりと太り、右頬にコブがある、いかにも精力的な感じの男である。
次の京流の家元は、東流家元に比べて五十二歳と若いだけに、英国製のシックな背広を巧みに着こなしていた。
「私は、京都に住んでおります京流の西川鳳でございます。京都においでになりました節は、ぜひお立ち寄りくださいますよう。国会議事堂にも、生け花が飾られておりますが、今月は、京流の担当になっておりますので、そのほうも、ご覧いただきたいと思います」
さりげなく自流の宣伝をしておくところは、なかなか頭の切れる男だ。
最後は、ただ一人の女流家元である新流の山野華子が、あざやかな英語で挨拶した。
「新流の山野華子でございます。みなさんからいつもきかれるのですが、私の名は本名でございます。山のふもとの野原に、花が咲いているという意味で、覚えていただきやすい名前でございますと同時に、生まれたときか

ら、華道をやるように運命づけられていたのかもしれません」
彼女は元駐米大使の娘で、母親が生け花に趣味があったので、幼時から生け花に親しみ、新流という新しい流派をつくって家元になったのである。外国生活が多かっただけに、英語は達者だった。
浜口は、三人の挨拶を聞きながら、ここまでは順調だが、これからが見ものだと思っていた。
ミス・キャサリンは生け花を勉強したがっている。どの流派を選ぶのか、できれば今日、キャサリン自身に決めてもらってくれと、外相にいわれていたからである。そのことは、三人の家元にもそれとなく伝えてあった。
浜口はキャサリンの反応を見たが、どの家元の挨拶にも、同じように拍手し、微笑していた。

6

つづいて、奥の和室で三人の家元が、花を生けることになった。いわば競作である。できあがったのを見てキャサリンが、どの流派を気に入るかを決めることになっていた。
三人の家元は、物静かに別室に消えたが、その背中には、ありありと対抗意識が顔をのぞかせていた。
無理もない話だ。弟子の一人に、アメリカ副大統領の一人娘がいるとなればハクがつくし、信者、いや、弟子の数も一挙に増加するだろう。また、アメリカへの進出も楽になるにちがいない。
しかし、もっと大きなメリットは、キャサリンを獲得した実績によって、一カ月後に迫った華道全国大会で、主導権を握りたいということだろう。
華道大会の準備委員会では、まず、会長選挙が行なわれるが、会長にどの流派の家元が選ばれるかが、現在の華道界の最大の関心事だった。
会長になった流派の利益は計りしれないものがある。
一例をとると、華道大会ではいろいろの議決事項があるが、それらを婉曲に自分の流派に有利なように引っぱって行くことができる。
国会議事堂や東宮御所などに、どの流派とどの流派が、どんな順番で花を生けるかとか、華道界全体で出す『華道全集』全三十二巻の、どの巻にどの流派が書くかなどのページ割りや、流派の名前をならべる場合の順位、外国へ日本代表として花の使節を送る場合、どの流派にす

るかとか、華道大会で各流派が生け花を展示する場合の広さや場所などについても、自然に、会長の発言権は大きくなる。

その他、週刊誌などの特集記事などでも、トップにもってくるのは、会長をやっている流派ということになる。また、近く日本文化に貢献したという理由で、華道界にも勲章が与えられるという噂があるが、そうなると、会長をさしおいてということは考えられず、まず会長をということになって、この順位は永久に消えないだろう。

今後、ますます熾烈になる華道界の勢力争いで、先勝の一点をあげる意味でも、キャサリンを獲得する必要があるのだ。

浜口は、興味を持って三人の制作過程を眺めた。

現代の華道が、どことなく、浜口の専攻した政治学に出てくるマキアベリの政治理論に似ているのがおもしろかった。マキアベリズムは、一言でいえば、倫理的な政治目的を達成するためには、卑劣な権謀術数を使用しなければならないということである。

いま、眼の前で花を生けている三人の家元が、マキアベリの著作を読んでいるかどうかはわからない。が、彼らのやっていることは、どこかマキアベリ的である。花は美しい。が、その花によって天下を制するために、家元たちは争っている。華道もいつのまにか政治の世界のものになってしまっているのかもしれない。

三人の家元には、それぞれ二、三人の弟子が材料を運び込んで来て、制作を手伝っていた。

東流は、前衛的なものでいくらしく、花に混じって、大きな古木やブロック、ペンキを塗った針金などを持ち込んでいる。

それに反して京流は伝統的な日本生け花で、わ、び、さ、びを表現するつもりらしく、色彩の豊かなみずみずしい生の花を抱えた弟子が、外と部屋の間を何回も往復する。

新流は物量作戦で、大量の集合の花を作っている。材料は紫苑である。もともと紫苑は、秋から冬にかけて咲く花である。季節が合わないなと浜口は思った。それに可憐さだけが取り柄の花である。いくらたくさん集めても効果はないのではないかとも考えたが、他の流派の弟子たちの中にも浜口と同じ感じを受けた者もいるらしく、露骨に軽蔑したような眼を向けていた。

三人の家元が、弟子に手伝わせて、懸命に作品に取りかかっている間、外相夫人の寿子と首相令嬢の典子は、

キャサリンに生け花の説明をしていたが、浜口が聞いていておもしろかったのは、京流の寿子は自然に京流の肩を持っていたし、東流の典子は、東流を持ち上げている。頭のいいキャサリンは、それを敏感に感じ取ったらしく、浜口の傍へ来ると、いたずらっぽく笑って、

「ミス・ノリコは東流で、ミセス・ヒサコは京流ね」

と、いった。

二人ともキャサリンの声が聞こえたらしく、顔を見合わせて微苦笑した。

一時間ほどで、三人の家元の作品が完成した。

東流の生け花は、いちばん巨大で、ガラスブロックやコンクリート、鉄片、銅線などが、花や古木と絡み合っている。生け花というよりアブストラクトな彫刻に近い。

「題は、『日本』です」

と、東郷流風が説明した。

そういわれれば、日本を感じさせなくもないと浜口は思った。さしずめ、コンクリートや鉄片は、現代の高層建築や大企業を象徴し、桜の木や花、それに白砂は、古い日本庭園や田園風景を象徴しているといえるだろう。

「非常に芸術的な作品ですね」

とキャサリンはいった。

東郷流風は、してやったりという顔をした。

次は京流の作品である。

こちらは、落ち着いた聚楽土の床の間に飾られ、床にかけた漢詩の軸、香炉、床柱とたくみに溶け合って、気品のある日本美を模っていた。

クリーム色の木蓮、若緑の雪やなぎ、紅いチューリップの色あざやかな花ばかりを集め、はっとするようにみずみずしい、純日本風な生け花である。

題は「春」だと、家元の西川鳳が説明した。

「おだやかな早春の光の中に、子供がぱっちりと眼を覚ましたような木蓮の花は、素朴なよろこびをあらわしています。自由を象徴する個性的な木蓮のカーブに、夢みるような白い花をつけた小枝をのどかになびかせている雪やなぎを配して和をあらわし、下方を、あざやかな紅いチューリップで引きしめてアクセントをつけ、あわせて愛らしさを表現したつもりです」

浜口は、通訳しながら、華道の家元というのは、いかにももっともらしいことをいうものだと感心した。キャサリンは、まじめな顔で熱心に聞いている。

西川鳳が、説明をおえて頭をさげると、キャサリンは、東流のときと同じように、短いが適切な感想を述べた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert